COVID-19やエムポックスの世界規模流行の経験とこれからの感染症流行対策のあり方を考える

西條　政幸
札幌市保健福祉局　保健所 / 国立感染症研究所

2019年12月に中国・武漢市で発生した，新規コロナウイルス（重症急性呼吸器症候群ウイルス2型，SARS-CoV-2）による重症感染症（Coronavirus Disease 2019, COVID-19）は，比較的短い間に世界的規模で流行した．SARS-CoV-2は接触，飛沫，エアロゾルによる伝播を通じてヒトからヒトへと伝播する．日本ではCOVID-19は2020年1月から流行し始め，日本国内でも医療機関や高齢者施設での流行が発生し，また，家庭や職場などでもCOVID-19患者が発生するようになった．流行が始まった2020年1月から2021年12月までのCOVID-19流行は病原性が極めて高いSARS-CoV-2武漢系統株によるもので，2022年1月からは病原性の低下したSARS-CoV-2オミクロン株による流行に置き換わった．SARS-CoV-2武漢系統株によるCOVID-19流行では，COVID-19患者では，死亡する患者がとても多く，致命率が高い感染症であった．オミクロン株によるCOVID-19流行では，患者の致命率は著しく低下した．COVID-19は，当初感染症法では2類感染症相当の疾患に指定されたことから，基本的にCOVID-19患者は隔離されなければなかった．しかし，一方でそれは，医療機関がCOVID-19患者を診ないための理由にもなった．流行が始まってから約3年超が経過した2023年5月にCOVID-19は感染症法上で2類感染症から，いわゆる季節性インフルエンザと同じく5類感染症へと指定は変更された．

ヒトにおけるエムポックスウイルス（Mpox virus, MPXV）感染症（human Mpox, HMPX）は，痘瘡（天然痘）に類似する感染症で，その病原体は痘瘡の病原体（痘瘡ウイルス）と同様にポックスウイルス科オルソポックスウイルス属に分類される．MPXVはアフリカ西部地域，中央部地域に生息するげっ歯類を宿主とし，ヒトからヒトへの伝播性は限定的で，HMPXはアフリカ中央部や西部の地域の散発的流行にとどまり，風土病的疾患であった．しかし，2022年から欧州，アメリカ大陸，その他の地域へと流行が拡がり，地理的には世界規模での流行に至っている．この世界規模流行ではMPXVは男性間の性行為を介してヒトからヒトに伝搬している．患者の多くは男性であり，HIV陽性者が約半数である．いわゆるmen who have sex with men（MSM）コミュニティで流行する性行為感染症のようである．

近年，私たちは世界規模の新興・再興ウイルス感染症の世界規模の流行を経験している．その現状と対策を踏まえて，今後の対策のあり方を再検討する時期にきている．感染症患者を社会から「隔離」して流行に対応する考え方から「隔離」を前提としない感染症対策に変更すること，あり方のパラダイムシフトが必要ではないか．

Presented by Medical*Online